

# 乳児保育における個別性と職員の協働性について

菊地 知子\*

## Indivisuality and Cooperativeness of Colleagues in Under-three ECEC (Early Childhood Education and Care)

Tomoko KIKUCHI

**要旨** 日本においては、0歳児に限らず3歳未満児の保育を「乳児保育」と称することが通例となっている。その乳児保育において、「一人一人」を大切に・個別性に配慮して応答する、ということは、極めて頻繁に言われることであり、その妥当性は疑われようもない。また一方で、乳児保育は“チーム”で行う、ということも極めて常用される言い方である。しかしながら、個別性への丁寧な応答と職員の協働性が互いに連関する特質として語られることはあまりなかったのではないかと。

本研究では、一人一人を大切にしつつ、チーム性を発揮して保育を行うとはいかなることかについて、筆者自らが身を置く乳児保育の現場での実践事例も挙げつつ、一人一人の育ちに応答的に関与していくためには、職員がチームで当たり協働性を発揮していくことが不可欠であるという個別性と協働性の相互性についての試論を展開した。

**キーワード**：乳児保育 個別性 協働性

### 1. はじめに

日本においては、0歳児に限らず3歳未満児の保育を「乳児保育」と称することが通例となっている。その乳児保育において、「一人一人」を大切に・個別性に配慮して応答する、ということは、極めて頻繁に言われることであり、その妥当性は疑われようもない。そして実際の乳児保育の場面において、月齢が低ければ低いほど、子ども一人一人の発達や生活リズム、その日の機嫌や体調に応じて、丁寧に保育しようと努めようとするともまた、専門性に依拠した順当な営為であるとも言えよう。

また一方で、乳児保育は“チーム”で行う、ということも極めて常用される言い方である。しかしながら、個別性への丁寧な応答と職員の協働性が互いに連関する特質として語られることはあまりな

かったのではないかと。本研究では、一人一人を大切にしつつ、チーム性を発揮して保育を行うとはいかなることかについて、筆者自らが身を置く乳児保育の現場での実践事例も挙げつつ、昭和23(1948)年に定められて久しい最低基準の適用上の今日的問題点にも触れながら考察を試みた。

### 2. 乳児保育における個別性の強調

2018年に施行された新「保育所保育指針」<sup>1)</sup>では、乳児保育と1歳以上3歳未満児の保育の狙いと内容の記載が充実した、と言われる。その中で引き続き際立つ文言として、「一人一人」「個別に」というものがある。保育所保育指針および保育所保育指針解説にも、それらが頻用されている。たとえば、「1乳児保育に関わるねらい及び内容 (2)ねらい及び内容」の中では、以下のように記述されている。

\* きくち ともこ 文教大学非常勤講師

- ・一人一人の発育に応じて、はう、立つ、歩くなど、十分に体を動かす。
- ・子どもの個人差や興味、関心に沿った保育室の環境を整えることが重要である。
- ・個人差に応じて授乳を行い、離乳を進めていく中で、様々な食品に少しずつ慣れ、食べることを楽しむ。
- ・一人一人の生活のリズムに応じて、安全な環境の下で十分に午睡をする。

以上のように、「一人一人」「個人差」という表現が頻用される。それはまた、「(2)ねらい及び内容」に続く「(3)保育の実施に関わる配慮事項」に、当然のことながら反映される。

- ・一人一人の発育及び発達状態や健康状態についての適切な判断に基づく保健的な対応を行うこと。
- ・一人一人の現在のありのままの状態から子どもの生活や発達過程を理解し、必要な働きかけをすることが大切である。

以上のように、「ねらいおよび内容」と同様に、「一人一人」「個人差」という表現が頻用される。

「1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容」についても見てみると、0歳児の項目に比して圧倒的に少なくはなるものの、「一人一人の子どもに応じた発達の援助が求められる」との記述があり、3歳以上児保育のねらい及び内容や配慮事項とはやはりこの点で一線を画していると言い得るかもしれない。

- ・著しい発達の見られる時期であるが、その進み具合や諸側面のバランスは個人差が大きく、(中略)一人一人の子どもに応じた発達の援助が求められる。

### 3. 職員の協働に関わる記述

以上に見てきた通り、乳児保育における個別性の重要性は、指針において十分に強調されていると言えよう。では、「チームで保育をする」ことが、ある意味当然あるいは必然とされている乳児保育における職員の協働については、指針ではどのように扱

われているだろうか。

0歳児保育については、「(3)保育の実施に関わる配慮事項」中で、次のように記載されている。(どのような文脈で扱われているかがわかるよう、「一人一人」「個別に」の使用例よりも長めに引用する)

- ・担当の保育士が替わる場合には、子どものそれまでの生育歴や発達過程に留意し、職員間で協力して対応すること。年度替わりあるいは年度途中で、担当の保育士が替わる場合、特に乳児保育では特定の保育士等との密接な関わりが重要であることから、子どもが安定して過ごすことができるための配慮が大切である。生育歴や発達過程等における個人差だけでなく、それまでの家庭やクラスにおける生活や遊びの中での子どもの様子や、一人一人が好きな遊びや玩具、絵本などについても、担当者間で丁寧に引き継いでいくようにすることが必要である。一人一人への働きかけや対応が急激に変わることのないよう、職員間で協力し、子どもにとって心地よいと感じる環境や保育士等との関係に即した対応が必要である。

以上のように記されている。また、1歳以上3歳未満児の保育においてもほぼ同様に、「(3)保育の実施に関わる配慮事項」の中で、次のように記載されている。

「子どものそれまでの経験や発達過程に留意し、職員間で協力して対応すること。(中略)子どもが、それまでの保育を通して育ってきた自我や人への信頼感などを基盤に、人と関わる力を発揮しながら、新しい担当の保育士との関係を築くことができるよう、全職員で配慮することが大切である。」

以上のように、1歳以上3歳未満児においても、職員間の協力、協働は、いわゆる「引き継ぎ」の場面に重要性が特化されているという感が否めない。

### 4. 事例から考える子どもの個別性と職員の協働性

先に見た通り、乳児保育において「個別性」とそれに応じる必要性は、保育所保育指針において相当

に強調されている一方、職員の協働性については、“担当が変わる場合の配慮”程度に記述があるのみである。個別性への対応や応答的な保育のために協働性が発揮されるべきであるといった相関的な語られ方ではない。しかしながら、実際の保育、こと集団保育の場においては、個別性に丁寧に応答的に配慮し、一人一人を大切にしている保育を行うことにおいては、職員が協働性を発揮することが不可欠であると思えてならない。以下に、事例を通して、一人一人の育ちに応答的に関与していくためには、職員がチームで当たり協働性を発揮していくことが不可欠であるという個別性と協働性の相互性についての試論を展開したい。

○事例提供：お茶の水女子大学いずみナーサリー保育士 中澤智子  
(傍線および註は筆者)

**事例1** 本当にその子がしたくてしていることなのだろうかという「揺らぎ」からの「転換」

いずみナーサリー（以下ナーサリー）では12歳児が同じ「にじぐみ」の部屋で過ごしており、12歳一緒の活動をすることも多い。6月のある日、E（4月生まれの1歳児）は、床に貼った大きな紙を自由に彩るダイナミックな絵の具遊びを、2歳児と同じ気持ちで遊んでいるように感じられていた。しかし、ある日の「にじぐみ」のクラスミーティングで一人の非常勤職員が「Eちゃん本当にこういう遊び方、好きなのかな。どうしていいかわからなくて、そうやるしかなくてやってるようにも見えるんだけど」と投げかけた。そこで改めてEが絵の具遊び・色あそびを楽しむことができる環境はどのようなものかについて、にじぐみの保育者全員（註：常勤非常勤各2名ずつの計4名）で考え、Eが座って、自分の幅の中でできる小さな紙を用意してみよう、ということになった。

それまでは早送りの映像のように、大きな紙に飛び込むようにしてあっという間に絵の具だらけになってその遊びを終えるということがEの絵の具遊びの常であったが、小さな紙を前に、周りのことを気にせず、じっくりと誰よりも後までやっており、

今までの絵の具遊びでは見たことのない新たな一面が見られた。その時のその子の思いに合うサイズや描き方があるのだと感じた。しかもそれは固定化できるものではなく変化していく。一人ひとりがやりたいと思える環境、選べる環境を、決めつけずに揺らぎながら、考えていくことが大切だと考えさせられた。そしてそれは、試行錯誤の中で、子どもたちと一緒に作っていくものであり、やってみて、違った、と思ったら、やり直せる、やってみたいと思うことをやってみてと言えてやってみられる、保育者同士の環境も、非常に重要であると考えた。

**事例2** 寄り添う思いと“余計なお世話”のはざま

にじぐみ1歳児のD（2歳1ヶ月）は、寝起きがよくなく、眠い時に起こすと、激しく泣くため、他の子の着替えが終わり、一段落して保育士がゆったりと関わられるようになる頃に起こすことが常であった。（註：D自身は日本生まれであるが、Dの両親は、日本からはるか遠い外国からの移住者で、寝食や生活スタイルについて私たちはほとんど何も知らない。入所は1歳になる前の1年2ヶ月ほど前。故郷での子育てのあり方や寝食の習慣など基本的なことを知っておきたいと思うものの、単純な質問でも批判や否定のように受け取られてしまうことがあるため、保護者に何か尋ねると言う行為を躊躇するような雰囲気もあった）

Dはテーブルについても、なかなか食べ始めず、他児が食べ終わって誰もいなくなる頃に食べ始める日が続いていた。ある日、テーブルについたDをだいぶ長く待ってから「一口食べてみる？」と促したところ、大泣きになる。子ども一人ひとりの思いやペースやタイミングがあること、大人のペースで進めてはいけないことを再確認した一方で、一緒に食べた方が楽しいのではないかと、そもそも、どうしてDはみんなが食べた後に食べるのか、あれこれ思いを巡らせた。

そしてある日のクラスミーティングで別の非常勤職員が、「みんなが先にテーブルについているところに後からやってくるのは、出遅れたような気分があって、すぐに食べないんじゃないか。5分10分長

く寝たからって変わらない。早めに起こして、みんなを迎える側にしてみたらどうか。」と言った。その翌日、少し早めに起こして先にテーブルにつけるようにしたところ、食べ始めるまで、少し時間があつたが、待たされていていやそうな様子は全くなく、後から来る子をニコニコと迎え入れ、おやつも皆と一緒に食べ始めた。

これらの事例について、職員間で考察したことを以下のようにまとめた。

「わかりきってなどいない、わかりきることなどない、という「わからなさ」の自覚、「理解」や「解釈」を固定化・絶対視しない「揺らぎ」の自覚と「転換」する覚悟、そして何より、子どもが自ら育とうとすることへの信頼を放棄せず、同じ場で保育をするもの同士が語り合い、語り合うように記録しながら、繰り返し確認していくことが、子ども一人ひとりが自分の思いを表す、あるいは表したいと願える、保育環境の創造につながるのではないか。」

以上の事例および考察から、乳児保育において、一人一人の思いに丁寧に応答するためには、職員の協働は不可欠であると言っていると考える。還元するならば、その子の存在を同じ重みで感じ取り、同じ程度に心配し世話をし、その子についての心配や喜びを共有し語り合える保育者集団＝“仲間”の存在が、子ども一人一人が安心して育ち、また、仲間の中で育ち合うための必要条件であると言えるのではないだろうか。つまり、子どもの個性や個人差を複数の保育者がさまざまな視点で見る協働性と、保育者同士が補い合いながら保育する協働性の両方が必要であると言えよう。

##### 5. 職員配置に関する最低基準が乳児保育の現場にもたらすもの

以上にみてきた通り、乳児保育において「一人ひとり」の子どもに応じること、個別性を重視することは非常に重要と考えられている。また、保育現場に身を置く筆者にとっても、それは現実味と説得力があるものとする。しかしながら、それら乳児保育において大切なこととして頻用される「一人一人

を大切にする」ということは、「チーム性」の強調の中で、見落としがちなこと、取りこぼされがちなことがあると考ええる。

昭和23年に定められた、児童福祉法による保育所等の最低基準によれば、職員配置について、「保育士の数は、乳児おおむね三人につき一人以上、満一歳以上満三歳に満たない幼児おおむね六人につき一人以上」と決めていることは周知の通りである。さらには、待機児童“問題”について世間でも喧しく論議されるようになったことも相まって、最低基準は「事実上の最高基準」とさえ囁かれるほどに、現状の職員配置に苦慮している自治体や法人は少なくない。今回の指針改定を受けて、これまで運営側の判断によって、たとえば1歳児について自主基準を1.5にするなど最低基準以上の人員配置を保っていた公立園や法人に対して、自治体が最低基準に合わせて1.6にするように勧告してきた、というような情報も複数耳にしている。

0歳児保育において保育士一人で3人を見る・見なければならぬ・見られるはず・見られないのは専門性が低い、というようなまなざしが職場内に存在し、乳児を担当する保育士、特に、若手や経験年数の少ない従事者を追い詰めるような現況に危険性を感じる。

実際に、ある自治体の公立園で0歳児を初めて担任した入職3年目の保育士Aさんに以下のような話を聞いた。

「0歳児8人のクラスを、先輩の正規職員と派遣の看護師とAさんの3人で担当。食事は、それぞれ段階の違う8人を、正職2人で介助しなければならないことが多い。10月になり、9月に入所した子どもも含め8名は全員が満1歳になっていた。副園長や他のクラスの正規職員からは、1人で0歳児3人を見ることはあたりまえ、という態度で接せられ、そういうものなのだと理解しなければいけないのだろうと感じる。特に食事については、他のクラスでも非常勤さんの手を借りたい（ほど忙しい）食事時には、正職2人で0歳児の食事を子ども4人ずつ見るのは仕方がないこと、と言われる。うまく食べさせられなかったり、夏には比較的上手にスプーンを使っていた子が手づかみ食べをするようになったり



と、特に食事時は“毎日が戦場”と感じつつ、0歳児はこういうものなのか、と思ったり、自分に能力がないからそうなるのかと悩んだりするのだ」という。

乳児保育という営みに対して肯定的な理解を寄せる他職種従事者の中には、「ひとりで3人の乳児を見ることができるのは保育士の専門性ゆえであり、素人には到底できない」といった発言や記述が散見される。繰り返しになるがそれは、保育や保育者に対するあくまでも肯定的な見解による。

しかし、そのような肯定的理解さえも、保育士「ひとり」で「3人」を見る、という、最低基準のある種の“今日的呪縛”のようなものを肯定もしくは強化しているようにも受け取ることができる。1:3という縛りが、必ずしも適正ではないことを、保育に携わる者だけでなく多くの非・保育者や行政なども、認識しなければならないのではないかと。正確には1:3「以上」であるし、筆者の感覚からすると、保育士「1人」に対して何人、という言い方そのものが、「チームで保育をすることが当たり前」であるはずの乳児保育にとっては現実的ではない、と思える。なぜなら、その言い方では、保育士「一人」で、3人までは見てもいいように捉えられてしまうからである。それは、いわゆるワンオペ育児となら変わらない。否、場合によってはワンオペ育児よりも質が悪い。(ワンオペ育児とは、夫などのパートナーが不在となり一人で育児を行うことを指す。)ある程度経験と良識のある保育者であれば、乳児3人を保育士一人でみるよりは、割り算すれば同じでも、乳児6人を保育士二人で見る方がだいぶましだと言うだろう。しかしそれはあくまでも「最低」基準であって、現実を考えれば保育士2人に乳児5人が、「最低」基準であって然るべきではないかと考える。

何より、保育士は「ひとり」で「3人」の0歳児を見ることができるはず・できるべき、といった視点が無意識裡に固定化することで、子ども一人一人の尊重や職員の協働性を蔑ろにすることにもつながりうることに、保育者や保育研究者等が自覚的であればならないと考える。

## 6. 家庭における虐待の実態から想起されるもの

一人ひとりの“個別性”に、ある「特定の」保育士等が応答することを当然視することには、大きな落とし穴もあるように感じる。子どもの虐待のうち最も多いのは実母によるものであることは広く知られている<sup>2)</sup>。

同時に、虐待により死亡した子どもの年齢で圧倒的に多いのが0歳児、ついで1歳児と、若年であるほど被虐待児数が多いことも、よく知られている<sup>3)</sup>

母親による虐待死が最も多いことや、0歳児の被虐待児が多いことの理由はただ一つではないであろう。しかし、おそらくは多くの場合「決して短くない時間」「たった一人で」「より非力な我が子を」生きさせなければならない状況下におかれやすい立場であっただろうことは想像に難くない。

翻って、保育者個人の資質能力として、子どもを決して虐待しない精神力のようなものが問われたりすることはない。それはおそらくは、専門性を持つ営みとしての“保育”あるいは行為者としての“保育者”に、愛情深く子どもの育ちを支えようと願い続けることを疑う余地なく含意されているからであろう。しかしながら、我が子を虐待してしまう母親同様に、「決して短くない時間」「たった一人で」「より非力な我が子を」みなければいけない責任を負わされていると思わざるをえないような状況は、専門性を生かす以前に、保育者自らが軽んじられ、粗末にされている状況であり、子どもを軽んじ、粗末にするような事態に陥ることも、想定外ではないと言えるのではないかと。

どのような親も、最初から我が子を虐待しようと思って親になってなどいないだろう。ましてや保育者は、その専門性に恥じないよう、愛情深く子どもの育ちを支えることを願い続けているし、そうあることが至極当然と見なされてもよい。それでもなお、先に見た若手保育者Aさんの例に留まらず、「自分一人で」、多くの場合複数の、子どもをみなければならないと思いつまみされているような状況下で、「(あんなに好きだと思っていた)子どもがかわいと思えない」「子どもが思い通りに動いてくれないことに苛立つ」といったことが、ごく日常的に

起こり得、ひいては保育者による虐待にもつながりかねない、ということもまた、看過しえない現実であり現代的課題であると考える。

#### 7. 「一人一人が大切にされ」「職員が協働性を発揮できる」保育のために

最近、ある地方新聞の第一面に大きく、「保育の現場 潜む虐待」と題された、保育士による虐待に関する記事<sup>4)</sup>が掲載された。記事によると、保育士らの労働組合「介護・保育ユニオン」が実施したアンケート調査で、25人の回答者中20人が「職場で保育士や職員が虐待にあたるような行為をしたのを見たことがあるか」という質問に対して「ある」と回答したという。「本当は子ども一番に考えたい」が、人手不足による過重労働やパワハラから、心身に余裕のない労働を強いられているためという。

この記事ではユニオンの担当者の言葉として『行政の定める保育士の配置人数は少なすぎ、過重労働で保育士が追い詰められている』と分析する』とし、0歳児の1:3の基準について具体的に触れているわけではないが、いずれにしても「余裕のない状況」「自分がなんとかしなければどうにもならない」と思ってしまうような状況が保育士を追い詰めていると言うために不足はないと言えよう。

子ども一人一人を大切に、職員が協働性を発揮することのできる保育が行われるために、知識の蓄積や情報の収集、技術の向上やそのための研修の受講など、保育士一人の工夫や努力に頼るだけでは不十分であることは明らかであろう。今まさに保育界は、保育の質（＝プロセスの質・構造の質・労働環境の質）の担保に真摯に向き合っていく時ではないか。

〈補記〉お茶の水女子大学附属いずみナーサリーについて

- ・大学附属の学内者向けの保育施設
- ・受け入れ対象は0～2歳児（6ヶ月になる月から3月末までで3歳になる乳幼児）
- ・保護者は学生や教職員
- ・日数選択制 保護者の働き方や学び方に応じて、登園日数が子どもによって週1から週5といろいろ。

- ・随時入所制 入学・入職、復学・復職のタイミングなどによりまちまち。
- ・条件を満たす入所希望者全員受け入れ
- ・2018年12月現在、0歳児7名、1歳児4名、2歳児9名（年度により変動、また同年度でも時期により変動）

#### 注記

- 1) 保育所保育指針 平成29年3月 厚生労働省／編 フレーベル館
- 2) 死亡した子どもの主な虐待加害者 認定特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワーク子ども虐待防止オレンジリボンHP統計データ <http://www.orangeribbon.jp/about/65215ebf8d78d7bc2aca9f2b0ec25bb1f9b541ae.jpg>
- 3) 死亡した子どもの人数と年齢 認定特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワーク子ども虐待防止オレンジリボンHP統計データ [http://www.orangeribbon.jp/about/assets\\_c/2018/09/224ed78606cd26cfc730de1f94ced743ecc05751-thumb-885x481-4284.png](http://www.orangeribbon.jp/about/assets_c/2018/09/224ed78606cd26cfc730de1f94ced743ecc05751-thumb-885x481-4284.png)
- 4) 東京新聞2018年11月17日号 中日新聞東京本社発行

#### 参考文献

- ・保育所保育指針解説 平成30年3月 厚生労働省／編 フレーベル館
- ・東京新聞、2018年11月17日号 中日新聞東京本社発行
- ・保育の質を高める—21世紀の保育観・保育条件・専門性 大宮勇雄 ひとなる書房 2006